



自由にものごとを考えられる伝統の校風が まわりに流されない自分らしい生き方の土台をつくる



株式会社良品計画
食品部 日向桃子さん
平成3年度卒 図案科(京都市立桃山中学校出身)

銅駝美術工芸高等学校
校長 名和野新吾

誰もが一度は利用したことのある「無印良品」。海外からも愛されるブランドとして多くのファンを魅了しています。なかでも食品アイテムは思わず手に取って食べたくなるものばかり。そんな消費者の心をつかむ食品開発で活躍している日向桃子さんにお話を伺いました。

仲間と出会い、衝撃の中を駆け抜けた高校時代

校長 本校を受検したきっかけから教えていただけますか？
日向 小学校5年生からの同級生で中学でも仲の良かった友達から、中3の夏休みに銅駝美工の体験学習に行くと言われ、面白そうだからと一緒に参加したのがきっかけです。両親が音楽や美術など芸術に関心が高く、家庭でも芸術的な話題が多かったですね。ほんやりとですが将来的に会社員としてきちっと働くというイメージは持ってなかったです。そんな中で銅駝美工を知り、制服もなく私服だからいいなあと(笑)。

校長 図案科(現デザイン専攻)は当時、倍率は高かったですよ。

日向 高かったです。やばいと思いました。受検の時、前の席の人が机に並べる絵の具や筆の数が多くて驚きました。私は中学校で購入した12色の絵の具。これはアカンなど。

校長 普通科高校への進学は考えなかったのですか？

日向 考えませんでした。滑り止めも受けていません。普通科目の受検にはそれほど不安がなかったため、実技の試験さえ通れば合格できるかなと。

校長 入学して銅駝美工の印象はいかがでしたか？

日向 まず1年生の亀岡での宿泊研修で一日中、実習をやることになり、えらいところに入ったなあと思いました(笑)。それとヌードモデルのデッサンは高校生にはかなり衝撃でした。

校長 専攻の授業で特に印象に残っていることは？

日向 夏休みの宿題で毎日、相当な枚数のデッサンをしたことです。私は入学時からデッサンに劣等感があり、並べて貼り出されてみんなの前で講評される時は一番キツかったです。心が折れそうでした。

校長 生徒は見た目の上手下手で評価しますが、先生は違う見方で評価します。大人の視点というか社会に出ると自分の公平さとは違うところで評価されることもあるので、そういう体験は社会性を育むに通じると思います。ただ、生徒は落ち込みますね。

日向 人それぞれ得意、不得意はあるから仕方ないと学びました。

校長 人は人、自分は自分。じゃあ自分の強みは何だろうということ、銅駝美工ではものづくりを通して学ぶのかもしれない。

日向 学校ではその日の気分で一人で居ようが、グループで行動しようが何の気兼ねもなく自由に過ごせました。良い意味で互いに干渉しないのが銅駝美工の魅力の一つですね。私は小学校、中学校、大学も実はそんなに学校生活を覚えていないのですが、高校での3年間は楽しくて印象に残っています。

校長 それは銅駝美工の伝統のようです。一人ひとりの個性を尊重しつつ、仲間とも深く通じ合える機会や場がたくさん



ある。そんなバランスが心地良さにつながり、保護者から「学校が楽しいと言っています」とよく聞きます。

日向 専攻の先生方は先輩という感じでした。年齢が近い方も多く、先生方の部屋は生徒も実習の準備などでよく出入りしていたので、わりと親しくフランクな感じで接しやすかったですね。

校長 思い出に残っている行事はありますか？

日向 やはり文化祭の演劇は衝撃でした。衣装や舞台美術まですべて生徒自ら作りますし、それぞれ得意なところを出しやすくて。先輩方が演じられた夢の遊眠社の「半神」が素晴らしかったです。それで演劇が好きになり、野田秀樹さんの公演や小劇場にも行くようになりました。

校長 文化祭がきっかけで演劇や舞台美術の道に進む生徒も多く、銅駝美工の一つの特徴にもなっています。

日向 体育祭はいつもは体育が苦手な子もこの日はがんばる！みたいな雰囲気でした。生徒会長が聖火に見立ててソフトクリーム片手に校長先生に選手宣誓をするというパフォーマンスを覚えています。



ひと皿の中でひろがるアートの世界

校長 卒業後の進路はどのように？

日向 立体、グラフィック、テキスタイルと一通り授業でして、布地が好きというもあり嵯峨美術短期大学のテキスタイル科へ進みました。

校長 大学からの就職活動はいかがでしたか？

日向 はじめは描くデザインの仕事を考えていました。でも、デザイン関係の会社説明会へ行くと、完全に職人さんの世界で募集が少ないか、または大手のアパレルだとデザインは外注に出されることが多くて、なかなか見つからず。それなら自分が一番好きなブランドで働こうと憧れだったブランドに入社し、店舗のある大阪のデパートで約1年、洋服の販売を担当しました。でも自分の思いと違うこともあり、大学時代の飲食関係のアルバイトに戻ったり、親の紹介で設計事務所のアシスタントを務めたりしました。

校長 アルバイトも飲食系ですが、「料理」がお好きだったのですか？

日向 そうですね、家に遊びに来た友達によくお菓子を作って出してもらって嬉ばれていました。それと設計事務所にいた頃、施主も施工側も家は一生に一度の大仕事で、失敗できないなと感じました。でも、お菓子は何度でも作り直せるゆとりがあって料理もお皿の盛り付けや色使いなど立体アートですし、興味はあったのだと思います。食べることもすきだし。

校長 そこから無印良品にはどうつながりますか？

日向 同級生から大津のCafé MUJIの募集を紹介されて応募したんです。カフェのキッチンにも入り、飲食事業の面白さを知りました。そこが閉店したので京都店に異動し、前任者の異動に伴い店長に。次に京都BALの新店舗の立ち上げに関わりそのまま店長にもなって、2007年に横浜、2009年に東京の本社へ異動となりました。

ポジティブな生き方は銅駝美工志望から？！

校長 本社へ異動されて食品開発の部署はいつからですか？

日向 2018年からです。主にレトルトのカレーや冷凍食品など、日々

の食事をサポートする商品の企画開発を担当することになりました。

校長 配属の異動に不安はなかったのですか？

日向 不安がなかったわけではないですが、たとえ失敗をしても人生それで終わりじゃないので。凹むこともありましたが、もし本当にダメだと思ったら違うことをしてみてもいいし、それは逃げではないと思っています。まずはなんでもやってみないとわからないですから。

校長 銅駝美工での経験が役に立っていることはありますか？

日向 進級制作や卒業制作で毎日かなりの制作数をこなした経験で鍛えられたと思います。デッサンは苦手でしたが、モノの特徴をどうつかんで形にするかという経験は商品開発に役立っていると思います。

校長 ものづくりには「感じる」ことが大切ですね。おいしく作りたい、だれかのために作りたいなど感じる。例えばデッサンも観察したり分析したり「感じる」ことから始まります。それを表現するのが作品づくりであり、これは社会での働き方(仕事)にも通じることです。自分の作品がみんなの前でさらされて落ち込んだり奮起してがんばることも、社会人ではみんな体験していくことです。数値化はできませんが、普通科高校との大きな差として現れるのはそこだと思っています。では最後に受検を考えている中学生や保護者にメッセージをお願いします。



日向 銅駝美工の強みは、自由にものごとを考えられる環境です。私の人生の土台は高校時代に築かれました。同級生も「わが道を行く」という感じで、時代に流されない自分らしい生き方をしている人が多いです。もっとも、中学生でこの高校を志望する時点で行動力が違いますよね(笑)。

校長 自分らしさを買けるのは、先生のほうも受け入れる度量があるからでしょう。先生が生徒を認めるから生徒同士も受け入れていく。人は認められると自分も相手を認められるものです。日向さんのように行動力があり、活躍されている方が銅駝美工には本当に多い。ただ中学生がそんな実績や学校の魅力を感じ進学を希望しても、まず保護者の理解が必要です。本校のことをもっと知っていただき、ファンになってもらうことが大切だと考えています。在校生たちに向けてのアドバイスはありますか？

日向 私は数学が苦手で、店長になったとき、もっと数学に関わることも勉強しておけばと痛感しました。好きな道を追究するには技術だけでなく、いろんな知識や経験が必要です。だからいろんな事を3年間で学んでおくべきだと思います。

校長 銅駝美工の生徒はいつも前向きです。作品制作を通してたくさん失敗や悔しい体験をすることで鍛えられていくのでしょう。厳しい社会でもしっかりと生きていける力は3年間で育まれていると感じています。



[このインタビューは2022年1月に実施したものです]